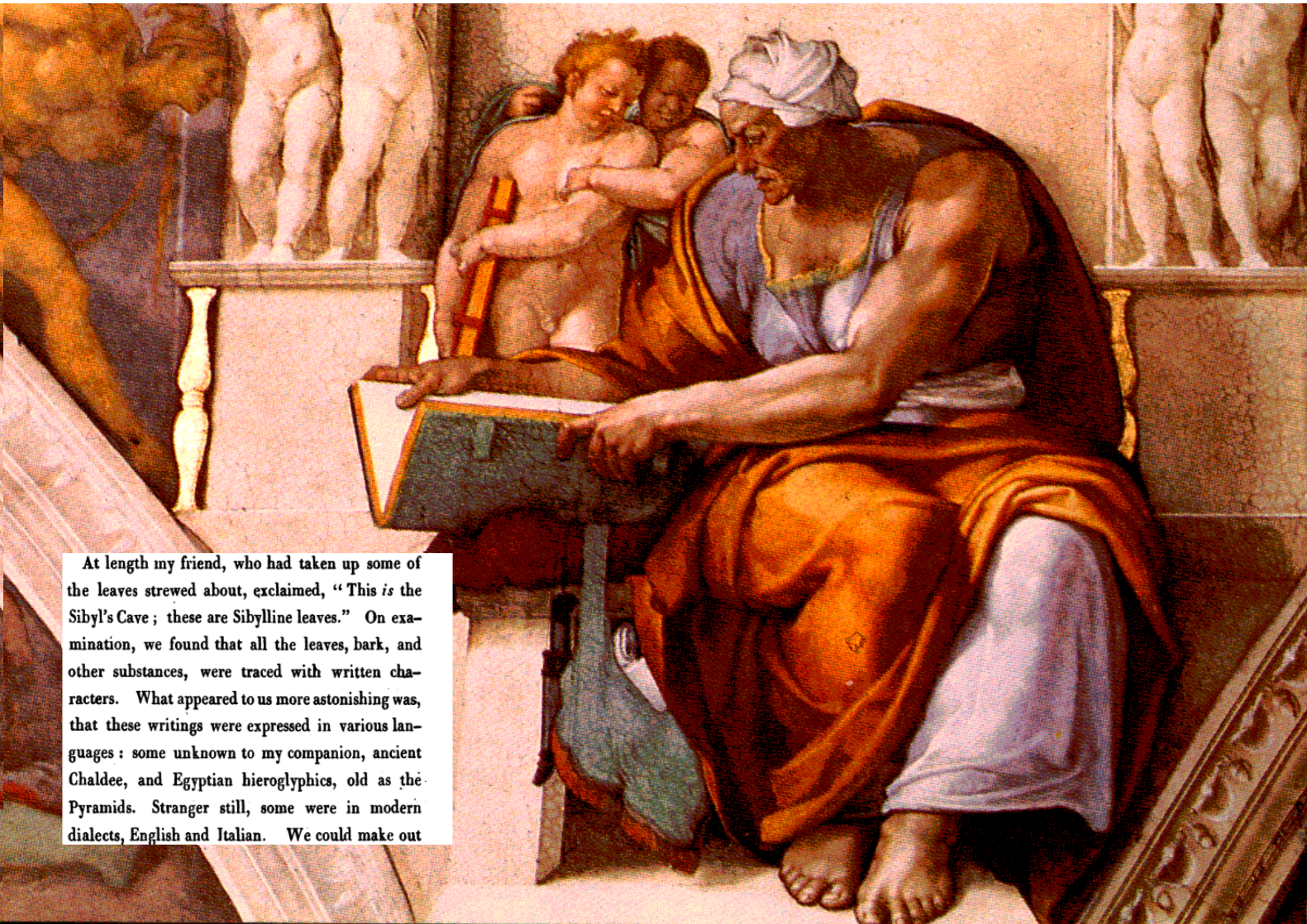


日本シェリー研究センター 第23回大会

日時：平成26年(2014年)11月29日(土)12時40分受付開始

場所：東京大学 本郷キャンパス 山上会館



At length my friend, who had taken up some of the leaves strewed about, exclaimed, "This *is* the Sibyl's Cave; these are Sibylline leaves." On examination, we found that all the leaves, bark, and other substances, were traced with written characters. What appeared to us more astonishing was, that these writings were expressed in various languages: some unknown to my companion, ancient Chaldee, and Egyptian hieroglyphics, old as the Pyramids. Stranger still, some were in modern dialects, English and Italian. We could make out

Mary W. Shelley "The Last Man"

英雄たちへの墓標 —— 生の書としてのメアリー・シェリーの『最後の人間』

『最後の人間』におけるメアリー・シェリーの政治観

『最後のひとり』の主人公は本当に最後のひとりなのか

シェリー研究センター

第 23 回大会

日時：平成 26 年 (2014 年) 11 月 29 日 (土) 12 時 40 分受付

場所：東京大学 本郷キャンパス 山上会館 2 階 大会議室

プログラム

1. 13:00 開会の辞 幹事会
2. 13:05 特別講演 岡田 温司

グランドツアーの世紀

3. 14:20 日本シェリー研究センター シンポジウム

“The Last Man”

司会 細川 美苗

パネリスト -I 岡 隼人

英雄たちへの墓標

—— 生の書としてのメアリー・シェリーの『最後の人間』

パネリスト -II 佐々木 真理

『最後の人間』におけるメアリー・シェリーの政治観
— 統治者、立法者についての考察 —

レスポンス 細川 美苗

『最後のひとり』の主人公は本当に最後のひとりなのか

4. 16:30 年次総会
昨年度分会計報告・会長選挙・その他

17:30 より山上会館地下 1 階会議室 001 にて懇親会 (会費 4,000 円)
を開きます。是非ご参加ください。

事務局からのご連絡

*今年度分 (2014 年) の会費未納の方は受付にてお支払いください。
*会場使用料の一部負担金として、参加者お一人 500 円を頂戴いたします。

特別講演

グランドツアーの世紀

岡田 温司

よく知られているように、「グランドツアー」は、イギリスの支配階級や貴族の子弟たちが、教育の最後の仕上げとして体験することになる、比較的長い期間 (数ヶ月から場合によっては二年間程度まで) のイタリア旅行のことで、十七世紀の末にはじまり十八世紀後半においてピークに達したといわれる。時はまさに、名高い哲学者ジョン・ロックが、その『教育論』(1693 年)において、知識と分別、冒険心や勇気、決断力や礼儀作法を養う絶好の機会として、若者の旅行を大いに推奨していた時代であった。文字どおり「かわいい子には旅をさせろ」というわけである。その旅は、いわば子供から大人への通過儀礼にして、「紳士の完成」に必要なものでもあったのだ。哲学者アダム・スミスやジョージ・パークリー等は、ほかでもなく貴族の子弟のチューター役として長靴の半島に赴いたのだった。文豪サミュエル・ジョンソンは、惜しくもイタリア旅行の機会を逃してしまったことで、ある種の劣等感さえ抱いていたという。

まして、画家や建築家や音楽家といった芸術家たちにいたっては何をいわずや、である。これに呼応するようにして、コレクターやディレクターたちも、半島各地の遺跡を徘徊し、サロンにたむろするようになる。さらに十八世紀の後半になると、多彩な自然の造形に恵まれたこの国は、自然学者たちの鋭い目をも惹きつけるようになる。

かくのごとく「グランドツアー」は、この時代のヨーロッパの文化を特徴づけるもっとも興味深い現象のひとつであるといってもけって過言ではない。命の危険性とも隣り合わせの長旅にもかかわらず、なぜイタリアは多くの旅人を虜にしてきたのだろうか。彼らはそこで何を見て、誰と出会い、そして何を携えて本国への帰途についてのだろうか。イタリアという坩堝のなかで、いかなる異質なものが火花を散らしあい、そして新たなものが醸成されて、ヨーロッパへと発信されていったのだろうか。

いわゆる「ヨーロッパ」という意識の形成にとっても、「グランドツアー」はひとつの重要な契機となっていると考えられる。また近年、十八世紀の文化や芸術、文学や思想の研究において、各地のサロンや人的交流——いわゆる「文芸的公共性」——の果たした役割がクローズアップされているが、その意味でも「グランドツアー」の意義は大きい。愛とエロスの「悦楽の園 Hortus Deliciarum」にして、自然と芸術の無尽蔵の「博物館 Museum」、フォークロアと人類学の「標本 Exemplum」にして、心と体の「療養所 Sanatorium」たる国に、グランドツアー客とともに即席の旅に出かけよう。

(おかだ・あつし：京都大学)

第23回大会 シンポジウム

“The Last Man”

『最後のひとり』の主人公は本当に最後のひとりなのか

司会・レスポンス 細川 美苗

今回のシンポジウムは、パーシー・シェリーの没後最初に書かれたメアリー・シェリーの小説である『最後のひとり』(2007年出版の翻訳本のタイトルは『最後のひとり』ですが、タイトルの訳については各発表者に任せます)を取り上げる。1826年に出版された『最後のひとり』は、21世紀における疫病の流行を生き残った主人公ライオネル・ヴァーニーが、その人生を振り返り描く物語である。物語の前半においてはイギリスにおける政治闘争が描かれ、後半では、疫病の流行によりもはや政治的な統治が不可能となった社会において、主人公たちが可能な共同体を模索する姿が描かれている。パーシー・シェリーをはじめとする当時の政治思想との関わりから論じられることが多く、そのような視点は本小説を読み解くうえで重要なものであることは間違いない。本シンポジウムにおいても小説に描かれる政治性を主眼としつつ、それが疫病や小説自体の複雑な構造、およびロマン派時代に出版されたその他の書きものと持つ関係についても俯瞰できればと思う。

佐々木真理氏は小説内における政治性という観点から統治者の問題について考察し、メアリーの政治観を探る。岡隼人氏は物語の政治性を歴史的なコンテクストへと拡大し、パーシー・シェリーの作品との関連へと論を展開する。

私はパネリストのお二人が詳しく取り上げてくださる小説の主眼である政治性から少し離れて、小説の構造や時代背景について少し補足的に説明したいと思います。小説が書かれた当時に「最後のひとり」というテーマが持っていた広がりを確認し、意図的に物語が埋め込まれている物語の構造の複雑さを指摘したうえで、歴史の終焉とみなされるべき『最後のひとり』が構造上その設定を無効化している可能性に言及する。また、そのような自己矛盾を孕む構造が小説の意味に対して持つ効果について、フロアの方々の意見を伺いつつシンポジウムを進行したいと思う。小説自体が大変長く内容も重層的であり、小説内における他のテキストへの言及や伝記的事実の示唆も多く、さまざまな解釈が可能な物語である。私のような若輩者では手に負えない豊かな意味の広がりを持つテキストでありますので、フロアにおられる方々のお力をお借りしてさまざまな視点からの意見を得ることで、素晴らしいシンポジウムとなることを切望している。

(ほそかわ・みなえ : 松山大学)

英雄たちへの墓標

——生の書としてのメアリー・シェリーの『最後の人間』

パネリスト I 岡 隼人

メアリー・シェリーの『最後の人間』は内容的に前半と後半部分に分けることが出来る。前半は主要キャラクターたちの形成する小さな共同体の誕生と崩壊を描く。後半は雰囲気が一変して、よりマクロ的視点で疫病を中心とした破壊的な力が主要キャラクターたちを含めた人間をいかにこの地上から葬り去っていくか、そして、その絶対的な力に対する人間の無力さを描く。『最後の人間』は「死の書」と呼べるくらいに作中で数えきれないほどの人が死ぬ。メアリーの長編小説6作品中、最もダークな作品であると言える。

本発表も内容的に2部構成となる。前半は作中の2人の英雄に焦点を当てる。英雄と言っても、両英雄の定義はそれぞれ異なる。レイモンドはギリシアを救うため自己犠牲的精神でトルコとの戦争に身を投じる。しかし、抑えられない野心と情念故に妻パーディタへの愛を蔑ろにしてしまうのも事実だ。このように自らの野心と情念を満足させるため、身近な者たちへの愛を忘れて武力を頼りにする典型的な英雄がいる一方で、正反対の資質を備えた英雄がいる。レイモンドの後を引き継ぎ護国卿となったエイドリアンは、他者を救う際に武力に頼らずに愛の力を用いる。彼は感染の恐れがあるにもかかわらず、疫病にかかって苦しむ病人のもとを慰問して看病までする。レイモンドの例が示すような、既存の典型的な英雄の定義とは全く異なる英雄像である。このメアリーの提示する「新たな」英雄像を他作品も参考にしながら考察する。

そして、後半では疫病などの脅威により人間たちがその英雄性を見失い、動物的な側面が強調されていく過程を辿る。生きるために生きることを余儀なくされていく人間たちと、その変化に対する語り手の態度も注目したい。そして、この物語の主人公であり語り手でもあるライオネルを除いた人間たちが(おそらく)死に絶えた世界を、彼が文字通り「最後の人間」となって生きていく結末部分に言及する。そこに一縷の希望もないのか、それとも僅かながらもあるのか。『最後の人間』を「生の書」として捉えることは不可能なのか、可能なのかを探りたいと思う。最後に出来れば、作中に括弧つきで現れる“life”とは何かという疑問と、パーシーの最後の詩 *The Triumph of Life* との繋がりにまで議論を展開させて、パーシー研究者のご助言を仰ぎたいと思う。

(おか・はやと : 同志社大学大学院生)

『最後の人間』におけるメアリー・シェリーの政治観

—統治者、立法者についての考察—

パネリスト II

佐々木 眞理

『最後の人間』では、イングランドの政治問題が大きく取り上げられる。2073年、国民の要求により内紛も起こらず穏やかに王は退位し、イングランドは共和制となる。イングランドは王を廃したが、階級制度は維持され、王党、貴族党、民主党からなる議会はピューリタン革命を彷彿させる。王党のレイモンド卿と特権階級の廃止をもくろむ民主党のライランドの二人が護国卿(統治者)の地位争いにしのぎを削る。しかし二人とも順次手に入れたその座にとどまる事は許されなかった。

物語の後半部では、東ヨーロッパで発生した疫病がついにイングランドにも侵入、猛威をふるい人類存亡の危機に怯える時代となる。この恐怖の時代にエイドリアンが護国卿となる。元王家の嫡子エイドリアンはその身分にも関わらず共和主義者である。ギリシアの自由のためにトルコに戦いにでかけてしまう護国卿レイモンド卿にバイロンを見るように、読み手はエイドリアンにもパーシー・シェリーを重ねるだろう。そこにこそメアリーの思惑がある。政治論議に明け暮れた彼らを政治の表舞台に立たせてみせようと、想像力豊かに大胆な構想を企てたことにこの物語の面白みがある。作者はシェリーとバイロンの強烈で個性あふれる気質と精神を、吐息を感じられるほどに彼らの姿を具現する。しかし、この小説においてもひとつ興味深いところは、彼らの進歩的な政治思想に影響を受けたとはいえ、メアリー自身が当時の政治思想をどう吸収しているかが読み取れるところである。作者は国を担う統治者としての資質をクローズアップし、真に政治を担わせられる人物はいかなる人物かを分析している。そして、注意深く作者の政治問題に関しての言及を見てゆくと、民主主義についてメアリー自身の見方が現れていると考えられる。私の発表ではルソーを信奉していたパーシーをどのように護国卿へと仕立て上げているのか、その結果メアリーはパーシーを理想とした統治者として描けているのかなどに触れ、この小説に表れたメアリーの政治観を探してみたい。そして、理想とした政治体、統治についてパーシーは現実的にどのような形を考えていたのか、是非フロアからのご意見を賜りたい。

(ささき・まり : 武蔵野大学)